


 書評

市川忠彦 著

誤りやすい異常脳波 (第3版)

飛松省三

脳波を自在に読みこなすために

コンピュータ断層撮影法(CT)や磁気共鳴画像(MRI)の発達により、脳の形態異常を画像として捉えるのは容易になってきた。このため、脳波の有用性を理解している神経内科医、精神科医、脳外科医ですら、近年は脳波よりも画像所見を重視するようになってきている。しかし、画像として捉えられることの少ない機能的神経疾患群、特にてんかんの診断と治療には脳波は欠かせない補助診断法であり、代謝性脳症、脳死の診断にも有用な検査法である。脳波を自在に読みこなすには、脳波に対する経験と臨床的知識が不可欠である。しかも、脳波はデジタル情報ではなくてアナログ情報である分、記録用紙に書かれた膨大な量の波形に対して、どこが正常でどこが異常なのか見当をつけなければならない。その意味で初学者にとって脳波は厄介な存在である。本書ではそういった脳波波形のどこに目を向けて判読すればよいのかが簡潔にまとめられている。

第3版は第2版に比べ、図が41枚増え、頁数も47頁増加した。これは、新しく取り入れた脳波所見(ウィケット棘波, SREDAなど)、国際臨床神経生理学学会の定義に基づき波形の解釈が見直された項目(前頭部間欠律動性デルタ活動, psychomotor variantなど)、異常と誤りやすい特殊脳波(small sharp spikes, 14 & 6 Hz 陽性群発など)を独立した章としたためである。そのうえ、すべての図と表にビギナーコースとアドバンスコース名が標示されている。初級者はビギナーコースを読破すれば、臨床脳

波学の基礎を学ぶことができる。一定の経験を積んだ中級者には、修得して欲しい波形がアドバンスコースとして用意されている。上級者や脳波を教える者には、基礎知識の確認あるいは疑問な所見を見たとき直ちに参照するのに便利である。脳波に関する教科書、解説書は多数あるが、この『誤りやすい異常脳波』は従来の発想にない入門書であり、解説書である。そうした点が評価され、1989年に初版が出版されてから年を重ね、2005年の春に第3版が出版されるに至ったのであろう。著者のこの本に対する情熱と深い造詣に敬意を表したい。

脳波所見報告書を書くに当たって、評者自身が肝に銘じていることは、できるだけ客観的に脳波を順序立てて判読することである。また、理想とする報告書は、第三者が脳波所見を頭の中にすぐに思い描けるものでなくてはならない。本書は、評者が考えるような手順を踏んで、特徴ある脳波所見を明解に解説しており、自然と脳波判読が身に付くように配慮されている。本書により、多くの医師が脳波に興味をもってくださいるものと確信する。なお、本書では視察的な波形分析に力点がおかれており、脳波の最も基本的な正常脳波や定型的な異常脳波の発生機序についての記載はほとんどないので、初心者には本書と脳波入門書をあわせて手許においておくことを勧めたい。

(九州大学大学院脳研教授・神経生理学)

●B5 296頁 2005 定価5,775円(本体5,500円+税) 医学書院